

清掃の主体的学習

足利市立第二中学校 岡村 芳一

1 はじめに

清掃つまり掃除の時間は、どの学校でもたいへん問題点をかかえているらしい。時間になっても分担場所へなかなか集合しなかったり、集まっても雑談やふらふら遊びをしていて、さっぱり掃除が進まない。いざ始めても、ほうきの使い方さえ知らない。ぞうきんとなると、なおさらである。(家庭でも使わないようになりつつあるようだが)ほんのわずかの人数が犠牲的精神?で、どうにか掃除分担としての責任を果しているにすぎない。

それでも昔(昭和40年頃まで)は、まだよかった。率先垂範の文字どおり、教師が真先に掃除していると、たいていの女生徒は先生に申し訳けないと思うからか、教師のあとについて掃除をやったものだ。男生徒は、遊んでいることが多かったようだが、最近では違う。教師がひとり掃除をやっていれば、生徒の方は遊んだり雑談にふけったりしている場面がよく見られる。

そこでこの状態を改善するために、教師はまず率先垂範を断念する。即ち生徒の掃除ぶりを監督する立場となるのである。自分で掃除をしていたのでは、思うように監督の目を光らすことができないからである。汚れている場所・ごみのある場所を見つけては、生徒に指図する。遊んでいるものには、小言がとぶ。さぼるものには、罰もある。ついには、さぼり防止のための規則までができる。かくして生徒たちは、仕方なしに掃除をやらされている。

ここには全く他律的な、受身的な教育活動がある。考えようによっては、清掃の時間は学校という構造物を清掃するための一種の労働力として、生徒たちは使われていることになる。教師は、その監督者なのである。(清掃分担表に監督者欄と書いてある学校もある。)指導者ではないのである。

2 子どもの実態

ところで子ども達は、どのくらい掃除というものの経験があるのだろうか。次表①は、本校3年生のあるクラスの家庭における実態である。(4月11日調査)

表① あなたは家庭で、どんな掃除をしているか。

種別	頻度	毎日行う	時々行う
1. (自分の)部屋の掃除		7	44
2. 勉強机の整とんや掃除		12	10
3. 玄関や庭などをはく		5	15
4. 床・その他をふく		5	7
5. その他		7	10

数字は%

（この表は、同一人が1～5のいくつかを行う場合が考えられるので、各欄の合計は意味がない。）

この表を見てわかることは、子ども達は家庭ではほとんど掃除をしていないということである。ときどき（自分の）部屋を掃除するものが半数近くいるものの、他は極めて少い数字がでている。「ふく」ことを行っているものは、実に10人中1人いないのである。思うに家庭にあっては、母親が中学3年になった子どもの身辺を、愛情をもってきれいに整とんしたり掃除してやっているに違いない。そして電化の発達した現代が、子どもの掃除という作業を奪ってしまったのかもしれない。とにかく家庭での清掃体験は、ほとんどあてにならない。

一方、校内の状況はどうだろうか。表②を見ていただきたい。学校においてもやはり、清掃時間は多くの改善すべき点が残されていることになる。

表② 去年の清掃時間を反省して、印象として残っていること。

項	目	応答率
よかったと思う	よくやったと思う	10
	みんなと協力できた	5
	その他のよかったと思う反応	17
	無反応	68
わるかったと思う	開始時間に遅れがち	17
	さぼってしまった	37
	むだ話が多かった	12
	その他のわるかったと思う反応	4
	無反応	32

特に上表で、「よかったと思う」欄の無反応が68%、「わるかったと思う」欄の無反応が32%という数字が示すように、清掃時間への無関心さと自己評価の悪さを改めて認識させられる次第である。

3 清掃時間の位置づけ

(1) 清掃のねらい

読んで字の如く清掃とは、「きれいにそうじすること」である。もちろん学校での清掃であるから、「学校をきれいにそうじすること」である。学校をきれいにそうじするならば、専門の清掃作業員を雇ってプロにやってもらったほうが効果があるわけだが、（アメリカン・スクールなどで、この方法をやっているが）その清掃を子ども達にさせるのは、なぜだろうか。清掃予算がじゅうぶんでないためだろうか。どうもそうではないらしい。この清掃を通じて、子ども達の、「生活の場を、美しい清潔な環境にしておく習慣と、能力を育てる」ことがねらいであって、学校が美しくきれいになるのは、副次的な目標ではないかと思えるのである。従って、子ども達はそのような環境を作るための意欲・技能・方法・解決力等を育てられるべきであるという考え方である。

(2) 清掃時間のうけとめ方

本校では、毎朝15分間全校一せいに清掃の時間をとっている。つまり週にして90分、毎学期2回の大掃除を含めると、実に年間3700分(45分授業に換算して約84時間)になる。1・2年生の音楽・美術科の年間標準授業時数が、それぞれ70時間であることからすれば、清掃時間はそれらをはるかに超過する時間数なのである。

よってこの時間を、意図的・計画的に指導したならば、計りしれない成果が期待できることは想像に難くない。清掃時間は、清掃という作業を通じて人間づくりをする学習時間なのである。そして教師は、監督者ではなくて授業と同じ学習の指導者なのである。しかも特定教科の免許状と異って、教師である以上は誰でも共通して、この指導を担当することになるのである。

(3) 学力と清掃の考え方

学力とは、「学習によって得られた能力」と考えられる。そしてその得られた能力とは、「どのような学習によって得られたか」が問題なのである。通常いわれるところの学力は、どれだけ文化財の量を身につけたかということであり、その基底にあるものは、知識・理解を中心とする授業であるという考え方であり、いわゆる知識伝授式の授業である。

ところが、日進月歩で発展しつつある現代の世界では、必要とする知識量はぼう大なものであって、これに比して在学中に修得できる知識量たるや、誠に微々たるものである。それは義務教育段階では、あくまで基礎的・基本的なものにしかすぎない。従って重要なのは、今後学校を終えてからも自ら学びとれる能力が在学中に育てられるべきなのである。そして上述の知識・理解と、さらに正しいものの見方、考え方、問題解決力、方法力、創造力、態度などが共に育てられかつそれらが総合的にはたらいこそ、よりよい文化を創造し新しい社会を築いていける人間となると思うのである。今回の指導要領改訂に当って強調されている、「人間として調和のとれた子どもを育成する」も、この趣旨ではないだろうか。

この点清掃の時間にも、上述の学力要素の多くを育てることのできる機会が存在しているのである。以下、拙論とそれにもとづく実践を紹介し、ご批判、ご指導をいただきたいと思う。

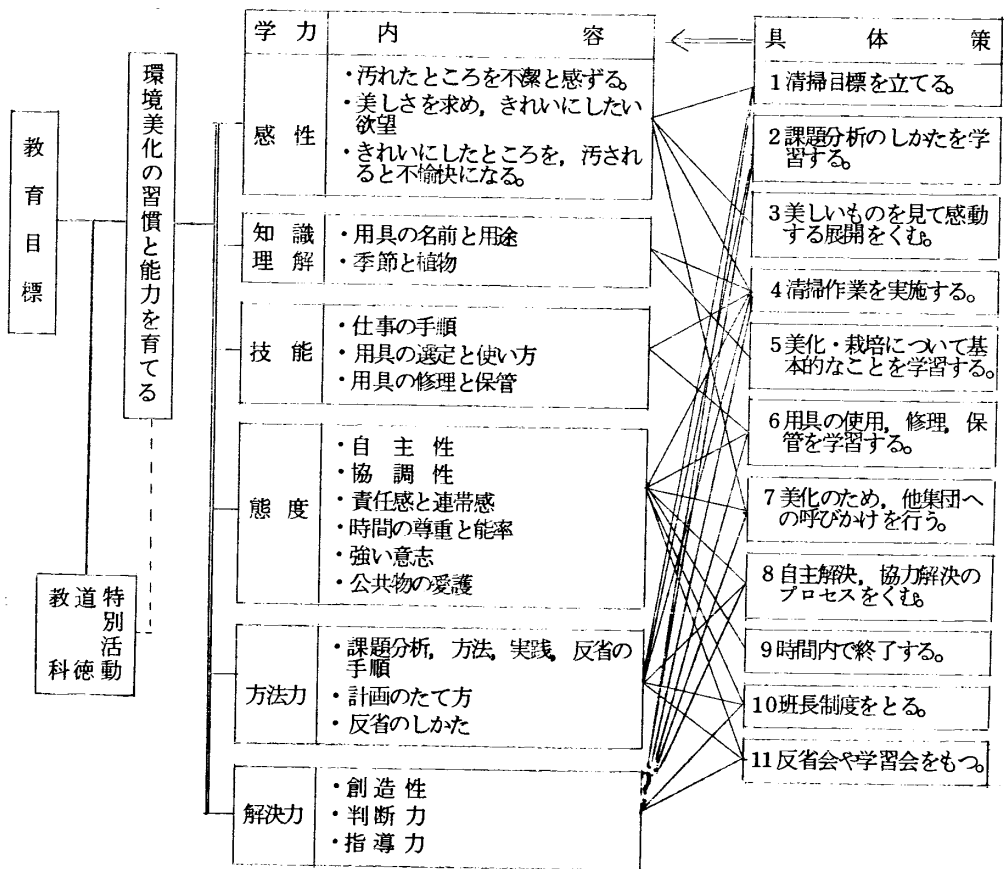
4 清掃指導構造図

清掃の時間を通じて育てられるべき学力を、感性、知識理解、技能、態度、方法力そして解決力とおさえ、それらの内容分析と達成するための具体策との関連を表示したのが、表③(次頁)である。この具体策を実行に移せば、やがては左方の学力が育てられ、ついには清掃目標をとおして教育目標に到達できるのではないかと考えたわけである。

5 展 開

(1) 目標を立てさせる

4月初め、清掃分担区に配当された生徒がきた。早速ほうきを持って清掃を始めようとしたが「待った」をかけた。「君達は、なんのために掃除をするのか」「清掃する目標は、何なのか」と尋ねてみた。反応がない。あまりにも突然に、風変りな質問をあげられたので、しばらく平静さを失っていたようだった。そこで、目標・めあてのないことをやっても、なにもならないから、全員で考え相談するようにしむけた。それでも意見は出なかった。



しばらくして前述の様に、清掃も一つの学習である事、そしてその年間時間は84時間にも及ぶ学校生活の貴重な時間である事、よってこの時間をどのように学習するか目標設定が絶対必要である事等を、わかり易く話してやった。かくするうちに、第1日の時間は終了してしまっ

た。第2日は、初めから全員の話し合い(学習会)が行われた。数人が前日の目標について、考えてきたようだった。「学校をきれいにするため」とか、「美しい住みよい学校をつくるため」とかが発表されたのを記憶している。しかしそれらの答えでは、「よし」としなかった。「学校を美しくするなら、清掃・美化の専門家がやればよい。なぜ皆さんたち生徒がやるのか。それはこの清掃をやることによって、何かを諸君に身につけてもらいたいからではなからうか」「従って清掃をやることによって、わたしはこういうことを身につけたい、あるいは、こんなことが出来る人間になりたい……というものをみんなで出し合い、その中からとりあえず出来そうなものを、わたしたち分担場所の目標にしようではないか」という指導を与え、この目標が決まらないうちは、清掃は始めないことにしたい……」と結んだ。

さて第3日目である。こんどはかなりのものが発言した。やっとのことで決定したものが、次表④にあるように、「時間を守ろう」ということであった。だが、これで清掃はまだ開始できない。目標は決定しても、それだけでは誠に漠然としている。その目標の中で、どんなことをこの

4月に達成しようとしているのか。(当番は、月単位で交替している。)即ち目標を細分化する目標分析・学習内容、それらの内容を身につけるための具体的方法が決定していなかったからである。

ついに、目標 - 内容 - 方法 - 評価(反省)の計画が、この日の最後になって完成したわけである。そしてそれらを推進していくうえで中心となるべき班長が互選され、第4日目から実質的な清掃が開始された。

以上のように、非常にまだるっこいプロセスは、ある程度予期していたものの、教師としては誠に辛棒強さが要求されたときである。しかしこの過程をいい加減にしまうと、冒頭に述べた従前の清掃に逆戻りしてしまうので、特に念を入れて指導したわけである。

表④

目 標	時間を守ろう		
内 容	1 時間どおり開始する。	2 15分間の能率をあげる。	3 時間内で終了する。
方 法	1. たがいに注意し合う。 2. 登校を早くする。 3. 班長は前もってきていて、校庭の時計をみる。 4. 教室を出るとき、たがいに声をかけあう。		
反省	4/21	△	○
	4/28	○	○

この表は、清掃区の見やすいところに掲示しておく。

○印：達成

△印：ほぼ達成

×印：努力を要する

このような手順は、課題解決にあたって当然ふまれるものであり、また解決力という学力にもつながることである。現在本稿をおこしている12～1月頃では、班長を中心にしてこの作業がわずか1日で出来るようになってきている。

参考として、11月の計画表を示すと次表⑤のようである。

表⑤

目 標	清掃の習慣を身につけよう		
内 容	1 ごみを自分で見つけられるようになる。	2 能率的に草取りをする。	3 側溝周辺を美化する。
方 法	1. 分担をはっきりする。(班長) 2. ひとりひとり離れて作業をする。 3. 道具をたいせつに取扱う。		
反省	11/17	○	○
	11/30	△	○

(2) 反省会をもつ

15分間のうちの最後の僅かではあるが、いつも反省会をもたせた。これも最初のうちは、「誰君が時間に遅れた」とか、「熱心でない人がいる」とか言い合っていたが、それよりも、まず、自分たちが決めた「方法」をみんなで実行しているか、していないとすればその原因はどこにあるのか………を中心に反省させ、必要とあらば「方法」を追加したり、改善したりするよう指導した。

4月下旬頃から、早くも若干の変容が見られるようになってきた。集合・移動・動作もかけ足となり、作業の能率も上がってきた。要するに、せっかく決定した目標・方法分析が空念仏に終わらないよう、お互いに確かめ合うねらいがここにある。即ち協力解決である。現在は、1～2分で反省会が終っている。

(3) 計画性を育てる

少しでも先を見透す力は、計画性に通ずるものである。庭を掃除するには、たいていほうきを持って集まる。側溝のごみさらいには、みんなシャベルを持ってくる。しかしその際、ごみ取りを持ってきたり、場合によってはごみの量を予想して、一輪車を持ってくるものはごく「まれ」である。普通子ども達は、掃くことが終わってはじめて、ごみ取りの必要に気づくのである。従って必要以上に時間がかかる。

このことから、ある仕事・作業を開始するには、その終りまでを見通して、どんな用具があるのか予め用意することを強く指導した。このような計画力は、次第に発展して反省会ではいつしか翌日の作業予定が話し合われるようになってきたり、ついにはある清掃か所は、何人で何日かかれば完成するという見通しまでも、立てられるようになってきた。

これらのことも学習方法の一領域であり、たんに清掃時間だけでなく、授業道具の準備、学習計画立案などの教科学習や日常生活にまで、応用され移行して働く学力だと思うのである。

(4) Garden Trip

7月のことであつたか、「ごみに気づけるようになる」という目標があつた。日常よく観察されることであるが、子どもは目前にごみがあつても、なんら気づくことなく通りすぎてしまうものである。そして教師に拾うことを指示されて、やっにごみに気づき、取って捨てる。美しいものへのあこがれ、汚れたところを見てそのままではいられない心情、それはきれいな環境にふれ、その「よさ」が味わえないものには、やはり出来ないことである。先人は、「心そこにあらざれば、見れども見えず」と言っている。

ガーデン・トリップとは、その語意のとおり校庭を小旅行することである。もちろん、ただ歩くだけではない。どこにごみがあり、どこをどうすればもっと美しい環境になるかを念頭において、巡回することである。これもまた最初のうちは、教師のあとをついて回るだけであつたが、回を重ねるに従い、回りながら進んでごみを拾ったり、ここはこうした方がよい………などというアイデアが自然と聞かれるようになってきた。ときには、他の分担区や学校全体を巡回したりして、観察眼を育てることをやった。従って、校庭をひとりぶらぶらしている（他からは、そう見える。）生徒がいても、決してとかめない。彼（彼女）は、よりよい環境づくりの手だてを

求めているのだから。

この点は、特に強調したいところである。教師は特別の場合を除いて、清掃場所の指示は出来るだけしないことである。仲間の班長に指示されることはあっても、それ以外は自分たちの目でごみを見つけ、自分たちできれいにする自主性を育てることがねらいであるからである。

ガーデン・トリップのもう一つの利点は、自分たちの手でやった清掃の努力が、こうも美しい環境になったということ、目で見えて確かめ、成功感、成就感を与えることができることにある。これがまた、次の課題解決への意欲となって作用することは、疑う余地がない。

ただ残念なことには、この審美感、情動力、感性を育てるのに、じゅうぶんな手が尽されていないことを反省している。現在考えられることは、遠足、旅行等で見た名園、美しい観光地を思い出して話し合うとか、絵画、写真の鑑賞などがあるが、清掃時間としては実現しそうもない。関連教科との連携も、重要課題となろう。

(5) 用具の使い方など

多くの学校で草取りかまが用意されているが、たいていは三日月形の刃の先が折れるか、または曲がっている。安全を考えて故意にやったのなら別だが、このことは子ども達が「かま」を縦に使うからである。この一例のように、彼らは清掃用具の使い方をほとんど身につけていない。そこで次のようなことを適時、場をとらえて指導した。

ア ほうきの使い方(どの場所では、どのほうきを、どう使うか)

イ 草取りかまの使い方

ウ 一輪車の使い方

エ 草かき、かま、シャベル等を使用後、洗って泥を落してから格納すること。

オ かまのとぎ方(男子のみ)

カ ほうき、ごみ取りなどの修理

現代っ子は、公共物の愛護精神に欠けているといわれている。それだけに、毎日の生活のあらゆる場面をとらえて、物をたいせつにする態度を育てなければならぬ。おぼつかない修理ながら、自分たちの創意工夫で直したごみ取りを、いつまでも愛用している姿はほほえましい。

(6) 班長制度

清掃作業には、どこでも班長をおいているのが普通である。ただこの班長が、たんなる清掃終了時の号令かけの役だけに終わっていたら、まずその意義はない。

清掃がほぼ順調に行われるようになった9月から、班長制度について話し合いをさせた。次は生徒たちのまとめた班長像である。これによって、以後の清掃は益々本質的なものへと進展していった。

班長はどのようなことができればよいか。

1 時間の計画がたてられる。

(反省会が終了してから、清掃終了のチャイムがなるように時間設計ができる)

2 清掃計画がたてられる。

(どこを、何人で何日かかればよいか)

3. 目標への到達度が、予測できる。

(全員を見て、目標にどの程度近づいているか判断する)

4. 反省会を司会したり、班員に注意ができる。

この班長も、初めはなり手がなかなか出なかった。上記の2学期初めからは、推せんですんなり決定するようになり、現在では表⑥-ウのように、自ら進んでやってみたいと思っているものが、かなり増加している。

また、このような話し合い学習があるので、雨天の日でも清掃は休みとしない。

6 指導上の留意点

冒頭に述べたように、清掃も教科と同じ学習であるという考え方をしている。教科における主体的学習は、先に拙論(主体的学習の実践—中学校英語科 昭51教育論文集)を発表したが、清掃の場合は作業学習という点異なるだけで、主体的学習の進め方や指導過程に大きな相違点はないと思っている。従って、ここでも指導の根本には、「教える教師」から「育てる教師」への発想があり、自主解決—協力解決—指導解決の手順が生きてくるのである。

客体に応じてその本質を見定め、課題解決の方法を考え、その方法に従って全力で課題を解決していくという主体的学習の理念は、まず生徒自身による課題解決(清掃目標に到達するという)からスタートする。そしてその解決の過程を通して、協力作業、反省会等の協力解決の努力がなされ最後に教師指導の段階となるわけである。

つまり指導者は、生徒を学校教育目標(ここでは清掃目標)に到達させるという大きな設計図を持っていて、生徒がその軌道からそれないように見守ってはいるが、いわゆる指図、介入はしないということである。生徒たちは、互いの仲間どうしで、あるいは班長を中心に自力解決していくものである。

しかし、これだけは教えないと生徒たちにはわからない……そして以後の指導に支障をきたすというのは、徹底して教えることにしている。つまり教えるべきこと、待つべきことを区別するわけである。ただ傍観していれば、主体性が育つと誤解されては困るわけである。

次は誠に古い言葉ながら、「寝ていて、ひとを起すな」ということである。時間尊重の精神を育てるには、まず教師自らチャイムと共に清掃場所へ行くことであり、勤労意欲を育てるには、やはり教師がシャベルをもち、かまを持って先頭に立たなければならない。しかもこれらのことは、絶えず実行して、生徒と根くらべをするくらいの覚悟が必要である。生徒には、学習することの厳しさが、教師には、教えることの厳しさがここに存在する。

そして最後に、子どもひとりひとりをよく見つめることを追加したい。この報告の関係生徒は、今まで授業時間その他で接触皆無であったので、まず全員の名前をおぼえることからスタートした。すると、どの子どもにも親近感がわき、ひとりひとりの生徒の良い点が目につくようになってきた。次には彼らの行動を観察しておき、良いことはどんなに小さいことでも、終りの反省会でほめるというKRを励行した。勤拙性、創造性、協力的態度、指導性等、声を大にして称賛した。このこと

は、徐々に生徒たちの思考・行動に反応し、それらがまた彼らの課題解決力を強化していくという作用があることがわかった。

「教師は指導力がなくなると、むやみにきまりを作って、それをカバーしようとする」という言葉があるが、自己への戒めとしたいと思う。

7 生徒の変容

(1) 生徒の声

4月から9か月を経た年末頃の生徒の声が、次表⑥である。年度当初の彼らと比較すると、大きな変容が見られる。

ア 清掃するに当って、目標や内容・方法をきめることについて

種 別	応 答 率	記 事
よい方法だと思う。	95%	目的がはっきりするから 清掃も勉強と同じだとわかるから 計画的にできるから
よくないと思う。	0	
わからない。	5%	

イ 清掃時間は、熱心にやっていると思いますか。

種 別	応 答 率
熱心にやっている。	28%
だいたい熱心にやっている	72%
怠けることが多い	0

ウ 班長を、ときにはやってみたいか。

種 別	応 答 率	記 事
やってみたい。	75%	修養になるから 将来必要だから 誰かが、やるべきものだから 興味があるから
やりたくない。	25%	自分にできそうもないから

エ あなたがこの清掃を通じて、初めて出来るようになったこと。

- ◎物事を実行するときは、目標や方法を考えてからやるということ。
- ◎自主的に清掃できるようになった。
- ◎計画性が、たいせつなことがわかるようになった。
 - ・時間を大事にするようになった。
 - ・ほうき(かま)の使い方が、正しくできるようになった。
 - ・一輪車が、うまく使えるようになった。
 - ・かまを砥ぐことが、できるようになった。

・掃除用具を修理することが、できるようになった。

◎道具は、洗って泥を落してからしまうことが身についた。

◎自分で、ごみを見つけられるようになった。

◎先生がいなくても、清掃できるようになった。

(◎印は、反応数の特に多いもの)

(2) 教師の観察メモの中から

○月○日 女生徒2名は、時間前にきて最もごみの多いところの清掃を開始していた。

○月○日 分担作業を終えた男生徒数名が、校門入口の坂下に大きな穴があり、車がスリップするのを目をつけ、一輪車で土砂を運び、穴埋めを自主的に行っていた。

○月○日 分担箇所を終えた女生徒2名は、校門外の道路にまで出て、ごみ拾いをやっていた。

○月○日 器具室前の側溝の土さらいを、清掃時間前に男生徒3名が行っていた。

など枚挙にいとまがない。もはや意図をもたない、ぶらぶらした行動は見られない。雑談で時を過すものもない。作業は機敏であり、能率的である。そして男女の特性を生かした作業内容が、生徒自身の計画によって進められるようになってきた。もちろん教師が出張等で不在であっても、ひとりひとりが課題解決という「ねらい」に向って努力している。

8 今後の問題として

(1) 輪を広げるといふこと

清掃美化ということは、一分担区に限らず全校的立場で共通理解がなされ、生徒ひとりひとりの心情に訴えられるものがあってこそ、より大きな効果をあげるものである。

土曜日にきれいに掃除された器具室(運動部室)の周辺が、月曜日の朝になると、ものすごく汚れていることがある。こんなとき、生徒たちは大変漬る。しかしまだその怒りを、朝礼や放送等を通じて他の集団や全校に呼びかけ、訴える行動に転化することが、まだじゅうぶんではない。生徒会美化委員会への働きかけも、よかろう。要は、小さな輪を全校という大きな輪にまで広げることである。

夏の炎天のもと、テニスコートの整備に重いローラーをころがした経験のあるものは、雨の日にそこを歩かれたら激怒する。油を敷き、常時床を整備している体育館では、他団体に貸与するのをとても嫌う。つまり、きれいにした汗の経験のあるもののみが、美化の呼びかけの権利があるわけである。この点が、今後の課題である。

(2) 家庭への呼びかけ

表①で述べたように、家庭における清掃・整理の生活習慣は、はなはたお粗末な状況といえよう。机の上を整とんし、部屋を清潔に保つというような身の回りや身の周りの環境を整えるという望ましい生活習慣は、やがて表面上の実行だけにとどまらず、そこに生活する人間の心情に大きな影響を与え、ついには各人の自ら生きる姿勢・生活態度にまでかかわることであると考えている。この点、学校と家庭とでいっそう緊密な連携を保ちつつ、子どもの望ましい習慣形成に当らなければならないと思う。そしてこのことは、青少年の時代こそ非常に重要であるからである。

(3) 組織化への試みを

「清掃も学習と同じである」という立場から、これを主体的学習の理論と手順で、試行錯誤的に展開したものが、本実践記録である。教科・領域と同様であれば、そこには年間指導計画があり、評価がなければならないが、実のところ体系づけたものはまだない。今後はこの分野も、組織化が進められなければならないと思っている。しかし、PDSの精神は前述の諸項でご理解いただけるものと思う。

9 おわりに

「清掃時間は、べつに成績は出ないし、入試にも関係ない」などという言葉を目にするところがある。このような声が学校を覆うようになれば、それだけで学校教育の破壊につながるものである。また、ある教師は言う、「清掃時間についての研究？ もっとほかに……」

なるほど「清掃の時間」は、現在の学校教育の中で、「陽の当たらない」分野ではある。たしかに教科学習や生徒会活動・部活動等の華々しさは、そこにはない。とかく生徒たちからも、ときには教師自身からも忘れられ、たんに毎日の惰性で運行されている一コマであるかもしれない。進学一辺倒や点数万能主義が横行している場合は、なおさらである。しかしそのわずかな時間帯の中に、実は子ども達の真の姿があり、指導の手を持っている現代の若者たちがいると思えたのである。あえて拙稿をまとめた所以も実はここにある。

いまや学習指導要領の改訂にともない、学校教育の局部肥大が見直されるときが訪れている。

「人間としての価値ある思考力・判断力そして行動性を導く教育は、どうあるべきか」が真剣に検討されなければならないときである。

諸賢のご批判・ご指導を期待しています。

評

家庭や学校での清掃における生徒の実態を的確には握し、現状を分析検討し、客観的な評価の上に立って、学校における清掃のあるべき姿を、詳細に述べられていることについて敬意を表します。

先生もご指摘のとおり、学力とは単なる知識の量や物知りではなく、生活の中で正しい判断力の上に立った実践力を身につけていくことであり、いわゆる目標行動であって、それが実践行動面にかかされて、はじめて生きた学習となるものであります。

清掃も学習の場であり、協力助け合いによる問題解決の場でもあり、集団の一員としての自覚や責任など、その他多くのものを学びとる場でもあります。

新しい教育課程の中では、勤労観や奉仕に対する態度の育成が、強調されていますが、これらの指導は、知情意の調和のとれた人間形成という立場からも、今後学校教育や家庭教育の中で見直されるべき大事な教育であります。

清掃指導にあたって、目標・学力・内容・手順・具体策が明確におさえられ、しかも学校の教育目標、各教科、道徳、特活との関連もはかられているので、各学校でも、指導資料として十分活用できるものではないかと思えます。